

インディアナ日本語学校便り だいごう 第29号

令和6年12月7日事務所 317-255-1631 メール ijls@indiana-j-school.net

(HP) <http://www.indiana-j-school.net>

校長 森 勝義

感謝祭週間

～それぞれの素敵なお過ごし方～

校長 森 勝義

保護者の皆様、感謝祭の1週間、このあたりからグンと冷え込んできました。火曜日の朝は道路に雪が残っていて気温が摂氏-8、8度でした。オーチャードに着くまでは安全運転。時速30マイルで運転し、無事に学校に着いて、校舎に入ったらびっくり。なんと子どもたちが半袖やシャツ一枚で授業を受けていました。子どもは褐色脂肪細胞が多いので寒さに強いということは聞いていましたが、元気に動き回っている子どもたちの姿を見て元気をもらっています。土曜日の日本語学校の子どもたちも同じか比べてみたいものです。さて、皆様はいかがお過ごしだったでしょうか。旅行に行かれたり、家族や友人とターキーを焼いて楽しまれたのでしょうか。感謝祭の週はアメリカでは1年で最も大きな祭日の一つで、感謝祭週間は、日本でいえばゴールデンウィークや正月三が日などと同じようなイメージだということは昨年経験しました。

当日はNY秋の風物詩「メイシーズ・サンクスギビングデー・パレード」を早朝からテレビ観戦しました。残念ながら本降りの中、パレードの出演者の団体、スタッフ、警備にあたる警察やボランティアの方々はずぶぬれになりながら一生懸命頑張っていました。

観ながら、思わず日本のゴールデンウィークに催される「みなとみらいパレード」を思い出しました。小中学生、高校生の団体が演奏し、踊りながら行進する姿をサンクスギビングパレードにだぶらせて観て、懐かしく思いました。

また、インディでは紅葉の季節も刹那的に過ぎて冬景色に変わろうとしています。日本ではちょうど今頃が紅葉のピークを迎えていると聞きました。ここ数週間の子どもたちの「川柳・俳句・短歌・ダジャレ」投稿にも、インディの紅葉をうたった作品が数多くありました。子どもたちの感性、自然への感動には驚かされます。8月10日から取り組んでいる作品募集、毎週100首を超える投稿があります。

小学1年生や2年生の児童が投稿機の周りに座り、一生懸命作品を書いている姿を見るとなんだかほほえましく、そして日本の文化を忘れないでいてくれることに大変うれしく思います。近づいていくと、「校長先生、これでいいかな」「校長先生、最後の5文字が浮かばないよー」と言って頭をひねりながら考えています。最近では保護者の方々の投稿もちらほら増えてきました。ぜひ晩秋の夜、お子様と一緒に一句ひねってみてはいかがでしょうか。

さて先々週「森勝義の土曜パラダイス」で「谷川俊太郎」さんの追悼をしました。初めて行う「黙とう」の所作、担任からの説明に大きくなずいていた子どもたちがいましたと、報告を受けました。「朝のリレー」もう一度読んでみてください。お子様と一緒に。

谷川俊太郎氏を偲ぶ

皆さん、おはようございます。 悲しいお知らせです。

詩人の谷川俊太郎さんが 11 月13日、お亡くなりになりました。みなさんも 国語の教科書や、詩集、絵本などで 多くの作品に 勇気もらったこと と思います。今日は 谷川俊太郎さんの死を心から お悔やみを するために 黙とうを ささげたいと思います。 園児・小学・中学・高校生の皆さん、私が 「黙とう」と言ったら、静かに 目を閉じ、谷川俊太郎さんの お気に入りの詩を思い浮かべましょう。 それではお願いします。

「黙とう」 黙とうやめ。ありがとうございました。最後に、私の大好きな詩を朗読します。 タイトル 「朝のリレー」

カムチャツカの若者が きりんの夢を みているとき

メキシコの娘は 朝もやの中で バスを待っている

ニューヨークの少女が ほほえみながら 寝返りを 打つとき

ローマの少年は 柱頭を染める 朝陽に ウィンクする

この地球では いつも どこかで 朝が はじまっている

ぼくらは 朝をリレーするのだ 経度から経度へと

そうして いわば交替で 地球を守る 眠る前の ひととき 耳をすますと

どこか遠くで 目覚まし時計のベルが 鳴っている

それは あなたの 送った朝を 誰かが しっかり 受けとめた 証拠なのだ

「江戸切子—せんさいなカットと美しい色さい」

小学4年2組 上田 めい

江戸切子は、みごとなカットぎじゅつと高品しつなガラスせい品で、東京都や国の伝とう工芸品としてひょうかされるようになりました。ここでは、江戸切子のみりょくを二つしょうかいします。

一つ目は、せんさいなカットです。江戸切子は、じゅくれんのしょく人が一つ一つ手作業でガラスにカットをほどこすことで、美しい文様がうかびあがります。代表的な文様としては、きくつなぎ、さやがた、きっこうなどがあります。二つ目は、美しい色さいです。無色とうめいなガラスに、あい色やべに色のガラスをかぶせます。照明のあたり具合で、ふんい気変化します。同じ文様でも、色がちがうと印しょうが変わります。ガラスの表面がこい色ほどカットがむずかしくなります。黒はもっともむずかしい色です。

このように、江戸切子は、とても美しいグラスです。東京に江戸切子を体験できる工ぼうがあるそうです。みなさんも、機会があったら体験してみてください。

「尾張七宝おわりしっぽう」

小学4年2組 熊谷 依音

尾張七宝は、愛知県あま市で作られる伝とう工芸品です。七つのほう石をちりばめたように美しいことから、七宝と名づけられました。七宝焼きとは、金ぞくとガラスの合体工芸です。七宝焼きの土台は、金ぞくです。土ではありません。作りたいものの大きさと形にした金ぞくの土台に、下絵をかきます。(写真①、②) 下絵に合わせて、銀線をのせてふち取ります(写真③)。この作業は、とても細かい作業で、ぎじゅつが必要です。次に、ゆう薬を使って色づけをしていきます(写真④)。クリスタルガラスを使ったゆう薬は、何種類もの色を作ることができます。銀ぱくや金ぱくを使ったりもします。キラキラとかがやく色を表げんすることができるのもみりょくです。ここまでできたら焼きます(写真⑤)。その後、みがいたらかん成です(写真⑥)。

このように、七宝焼きはクリスタルガラスでかかれているため、色あせしません。作家によって、風景などの美しいデザインや、大きいものから小さいものまで、さまざまな作品が作られています。

宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』を読んで

6年1組 羽田 康生

ぼくが宮沢賢治作品集を読んで一番印象に残った話は、「グスコーブドリの伝記」です。「グスコーブドリの伝記」の主なあらすじは、イーハトーヴの森の木こりの息子として育ったブドリは、お父さんとお母さん、そして妹と楽しく暮らしていました。しかし、その年はお日さまが春からへんに白く、夏になっても暑さがこず食料が手に入らず一人ぼっちになってしまいます。それでも、生きるため一生懸命働いて、やがて火山局につとめます。しかしまた冷害に襲われ、悲惨なことが起こらないようにとふん闘する話です。ぼくが印象に残ったところは、ブドリが「わたしのようなのは、これからもたくさんでます。わたしよりもっともっと何でもできる人が、わたしよりもっとりっぱにもっと美しく、仕事をしたり笑ったりしていくのですから。」と言ったところです。理由は、この文章には、ブドリの冷害を防ぐためなら、自分が死んでも構わないという気持ちが表れているからです。どきどきしたところは、ブドリの妹のネリがかごをしょった目のするどい男につれていかれるところです。はじめに読んだときは、これからどうなるんだろうとどきどきしました。この物語が気に入った理由は、ブドリの勇気と行動力がすごいと思ったからです。自分がブドリの立場だったら、自分だったら諦めていただろう場面でも、ブドリは諦めずに前へ突き進んでいくのがかっこいいと思いました。

◎11月23日

小学6年1組 赤木 七海
小学4年2組 後藤 茜
中学2年1組 中2ガール
小学4年2組 椎名 恵麻
職員
小学3年2組 松田 希子

<投稿作品>放送で紹介

「谷川さん たくさんの詩を ありがとう」
「ほしゅうこう 朝6時おき ねむたいな」
「おめでとう 俳句読まれた 友達よ」
「はじめてで イカを食べたら タコだった」
「いつまでも 好きだ谷川 俊太郎」
「谷川さん どんきが一番 すきだな」

<ダジャレコーナー>放送で紹介

中学3年2組 石澤 紅亜 「マスカラが 買えますから」
小学5年2組 仲良し軍団 「ラブレターが やぶれたー」
小学3年1組 寺澤 涼寧 「マスカットをたべたら まあ スカツとしたわ」
小学5年2組 入江 友 「ラーメン つけめん ぼくださめ」

<掲載作品>

小学6年1組 寺澤 悠人 「谷川さん 天国にいき 安らかに眠る」
小学6年1組 佐藤 翔紀 「寒さ来る 雪が降ってきた 小雪だ」
小学6年1組 町田 柚輝 「冬の日 に コンボタのみたい 手がこおる」
小学6年1組 ラスピナ陽光 「父と母 そだててくれて ありがとう」
中学2年1組 中2ガール 「授業中 マジカルバナナ やっていた」
小学3年1組 興津 凜 「せんにんが 千人いる」
小学3年2組 町田 大翔 「アジの アジは どんなアジ」



ヒゲ森の言葉の森・探検



しかい けいてい

四海兄弟

世界中の人々は、みな兄弟のように親しみ合うべきであるということ。「四海」は四方の海、転じて全世界。

一日、生きることは、
一歩、進むことでありたい。

湯川秀樹

1907年～1981年。理論物理学者。

今日を懸命に生きよう。一歩ずつ進むと、数年後には見違えるほど成長した自分になっているはずだ